

第 65 回加藤周一文庫公開講読会 『続羊の歌』を読む

2026 年 2 月 13 日

担当者：佐々木梓（立命館大学博士課程後期課程）

「外からみた日本」（後半）

第四段落

六週間の航海は、「アジアのなかの日本」をはっきりさせるためには、充分であった。北九州の海岸や神戸の港に似た風景は、アジアのどこにもない。外国人が外国人のためにつくった設備ではなく、その土地の人間がみずからの用に供するためにつくった「近代的」設備は、工場にしても、起重機にしても、病院にしても、マルセイユ以後日本においてはじめてあらわれる。その意味で、神戸はマルセイユに酷似し、シンガポールや香港に全く似ていない。だから表面的には、シンガポール・香港の方が、夜の街の灯を船の甲板から眺めたときに、神戸よりもはるかにマルセイユに似ているのであろう。「アジア」という漠然とした概念は再検討しなければならない。そういう考えは、神戸に上陸して、税関の手続をしている間も、絶えず私の脳裡に去来してやまなかった。

→外国の技術や建築様式、風俗といったものを、その土地の人間がその土地のために取り入れ再構築しているという特徴を見出すことで、「アジアのなかの日本」を相対化しているといえる。神戸の街並みからこうした眼差しを構築しつつ、舞台は京都に移っていく。

第五段落前半

しかし私は荷物を神戸に残したままその足ですぐに京都へ出かけた。子供が病気で、神戸まで迎えるに行くことができなかったのだと私を待っていた女はいった。私は何のために帰ってきたのかを説明して、そのまま別れる他ないのだとくり返し、彼女はなかなかそれを信じようとしなかった。「そんなことってあるかしら。こんなに待っていたのに」。そのとき私は同じことをくり返す私自身を憎んでいた。私は自分がひとりの人間の生活を精神的に破壊しようとしていることを感じた。「あなたは馬鹿ね、また同じことになるでしょうに……」そうにちがいがなかったろうが、将来「また同じことになる」かならぬかは、私にとって全く問題ではなかった。

「しかし私は荷物を神戸に残したままその足ですぐに京都へ出かけた。」

→実際の移動先は東京。移動先は虚構な一方で、「彼女」とは綾子氏を指し、ここでは抽象的な概念としての女性ではなく、具体的人物を示す。

【参考資料：鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか—『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018 年 10 月】

加藤の年次手帳の記録を事実とすれば、加藤は神戸からすぐに東京へ戻ったと思われる。三月四日に上陸し、三月九日には「Professor Suzuki」（おそらく鈴木信太郎）に角川書店で会う予定が書か

れている。では、なぜ神戸上陸後すぐに「京都で古い寺や庭を見て廻った」と記したのか。実は三月三〇日から四月三日まで加藤は京都に滞在している。留学を経た加藤の眼は留学前とは変わっていて、京都の町のみならず、古い寺や庭が留学前とは違って見えるかどうか確かめたかった。しかも、そのことを帰国直後のこととして記したかったのだ。

「私は何のために帰ってきたのかを説明して、そのまま別れる他ないのだとくり返し、彼女はなかなかそれを信じようとしなかった。」

→「彼女」に説明した帰国の理由とは、前章で記述された「遠い京都で私を待っているはずの人間を、いつまでも待たせておくのは、公正でないということまで考えはじめていた。手紙で心变りを報らせるというのも、相手を尊敬しないやり方であろう。会って説明した上で別れなければならない。そのためにはどうしても日本に帰らなければならない…」という事情であろう。「彼女」が受け入れがたいのも当然であり、「私」は自己を憎み、その感情は後続の自己問答の描写に繋がって行く。同じことを繰り返す自己を自覚しつつ、「私」は「将来「また同じことになる」かならぬかは、私にとって全く問題ではなかった」と今現在の決心を重視する。

第五段落後半

「不満な点があるのなら、いってくれ」と彼女はいった。そういうことではない。私はながく彼女を愛していると思っていたが、ひとりの女にほんとうに夢中になったときに、彼女と私との間の関係がそれとはちがうものであったということに気がついたのである。「不満な点などは一つもない、欠点があったとすれば、それはたしかに私の側にありすぎるほどあっただけだ」と私はいい、事実そう思っていた。相手に責任のない不幸を、私が相手の生活のなかにつくり出す、ということを承知の上で、私が行動する——行動せざるをえない、というときに、その当の相手と話すことのあるはずがない。私は喋り、喋ることの無意味さを感じ、疲れ切った。私は放心状態で彼女に別れ、二度と会うまいと考えた。もはや相手のことを考えつづける気力もなかった。それは完全に自己中心的な状態である。しかしそういう状態が成立すると同時に、私はそういう自分自身を第三者のように眺めてもいた。この「自己」とは何だろうか。ひとりの女から去って、別のもうひとりの女へ向う人間の内容は何であろうか。その二人の女との関係を除けば、私のなかには何も残らず、ただ空虚だけが拡まっているように思われた。

→別れの原因が自分自身にあるのだとしたら、その原因を話してほしいと述べる「彼女」に対し、「私」は別れの原因や責任はすべて「私」自身にあると伝える。「彼女」に対し、不幸を生じさせてしまうことを承知のうえで、それでも別れを選択せざるをえないとき、「私」は当の相手と話すことはないと考える。そこで相手との対話を中断してしまうことを、「私」自身も「自己中心的な状態」と自覚する。ここで、「私」の心理を「私」自身が批判するという、いわば批評的な眼差しが生まれている。この時点で、加藤は明確に〈自己〉と対峙し始める。相手の心理よりも、自身の行動を選択せざるを得ず、さらに相手に対し自身の心中を「喋る」——伝達することの無意味さを感じるがゆえに、伝達の基盤となる〈自己〉それ自体の揺らぎを意識しているといえる。

→このようにして「私」の意識は〈自己〉それ自体に向かっていき、揺らいだそれを再度見出す契機として、虚構の京都体験が描かれていくといえる。

第六段落前半

私はそのときすぐに東京へは帰らなかった。しばらく京都で古い寺や庭をみて廻った。東京で医者の仕事をはじめれば、多忙にまぎれて、我を忘れるだろう。しかし我を忘れることではなく、我を再び見出すこと、そのために、しばらく自分自身とだけつき合うことが、どうしても必要だと思われた。誰かと話したいという気もしたが、話すことのあるはずもなかった。私はひとりで夕方の盛り場を歩いた。身の廻りに日本人しかいないということ、みんな黒い髪をしていて、どこへ行くのか、絶え間なく流れるように舗道を歩いて来るということが、異様な、不思議な光景であるかのように、感じられた。身なりは、三年まえよりも、はるかによくなり、若い人たちが多くて、健康そうな明るい顔をしていた。この人たちは朝鮮とインドシナで終わったばかりのいくさとどう係りあって来たのだろうか、と私は考え、釜山とパリを想い出した。彼らがいくさに反応し、または反応しなかった日本は、私の知らない日本であった。しかし古い京都は、いつもそこにあった。

「私はそのときすぐに東京へは帰らなかった。しばらく京都で古い寺や庭をみて廻った。」

→単純に「寺や庭」と対象が示されるのではなく、ここで「古い」と形容がなされているのに留意したい。

「しかし我を忘れることではなく、我を再び見出すこと、そのために、しばらく自分自身とだけつき合うことが、どうしても必要だと思われた」

→忘我ではなく、空虚な自己の像を再び結ぶことを目的にした、いわば内省の舞台として京都が選ばれる。

「身の廻りに日本人しかいないということ、みんな黒い髪をしていて、どこへ行くのか、絶え間なく流れるように舗道を歩いて来るということが、異様な、不思議な光景であるかのように、感じられた」

→3年の留学を経て、以前は当たり前であったはずの群衆の風景が「不思議な」ものとして受容される。ここでは、日本の群衆を自己とは別の存在として眼差す視点が描かれる。

「身なりは、三年まえよりも、はるかによくなり、若い人たちが多くて、健康そうな明るい顔をしていた。」

→朝鮮特需による好景気が、人々の生活にも影響していることを暗に示しているか。

「この人たちは朝鮮とインドシナで終わったばかりのいくさとどう係りあって来たのだろうか、と私は考え、釜山とパリを想い出した。彼らがいくさに反応し、または反応しなかった日本は、私の知らない日本であった。」

→好景気を享受している人々がその背景にある戦争とどのように対峙してきたか、考えを巡らせている。実際に見てきた釜山やパリの土地を想起しながら、加藤は眼前の日本の人々が時勢とは無縁のように過ごしていることに違和感を覚えているといえるか。

○《朝鮮とインドシナで終わったばかりのいくさ》

→朝鮮戦争とインドシナ戦争を指す。

○《朝鮮戦争》

・一九五〇年六月から五三年七月までの大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国との戦争。北朝鮮軍は朝鮮半島南端に迫ったが、アメリカが国連を動かして武力介入し、一九五〇年一〇月国連軍・韓国軍は鴨緑江岸に進出。北朝鮮軍は中華人民共和国義勇軍の援助で反撃、戦線は北緯三八度線付近に定着。五一年七月休戦会談が開始され、五三年七月休戦協定が成立した。朝鮮動乱。(引用：『日本国語大辞典』)

○《インドシナ戦争》

・一九四六年から七年間、フランスとベトナム民主共和国の間で戦われた戦争。一九五四年、フランス軍の拠点ディエンビエンフーの陥落によりジュネーブ休戦協定が成立。(引用：『日本国語大辞典』)

第六段落後半

詩仙堂の座敷は底冷えがして、鹿追いの竹筒の岩を叩く音が高く、鋭く、冴えていた。大徳寺の山門の屋根の反り、八坂神社境内の朝の霜柱、仁和寺の白い垣と夕陽……どこでも観光客には出会わなかった。六波羅蜜寺には、男女が集っていたが、それは信者たちで、見物人ではなかった。古都のすべては、きびしい冬の寒気と共に、静かに私の身体中に浸みとおった。それまでの私には、洛中洛外をひとり歩き廻った後に訪ねてゆくところがあり、温い茶を飲みながら、世間話にくつろぐことのできる場所があった。その日の経験のすべては、その町で生れて育ったひとりの女の、さりげない身振りや、眼ざしや、細い小さな身体のなかに、組みこまれ、統一され、焦点を結んだ。そのことを、私はひとりで仏像のまえにたっていたときにも、あらかじめ予感していたのだ。しかしそういう予感は、今や、なかった。私の京都のすべてを要約することのできる生きた人間は、もうどこにもいなかったし、私の京都そのものが、もはやかつての私の京都ではなかった。 何度通ったかわからぬ小径を辿り、何度踏んだかわからぬ飛石を伝いながら、私はいまだかつてみたこともない町をみた。懐しい故郷……そんなものは、頭のなかにしかない。眼のまえにあるのは、一つの文化とその形式だけだ。そうしてある日、フィレンツェが私の眼のまえにあらわれたように、今また、京都が私の眼のまえにあらわれた。

○《詩仙堂》(京都市左京区)

【参考資料:京都府土木部都市計画課編『京都府の自然と名勝』1951年11月】

詩仙堂は江戸時代初期の詩人石川丈山の隠棲した跡で、丈山が本邦三十六歌仙に擬して狩野探幽筆の支那三十六詩仙像を居堂の四壁に掲げたところから詩仙堂と名付けられた。丈山は三河の人で年少くて徳川家康に仕え、大阪夏の陣で先陣の功を争い抜駈したので家康の怒を買ひ、致仕して剃髪し、京都に上り悠々自適の生活を送った。

「鹿追いの竹筒の岩を叩く音」

→詩仙堂には、徳川家康の家臣・石川丈山が考案したとされる鹿威しがあり、おそらくこの音を指すと思われる。同時代においても、この音は、「それは正確にひとつの間隔を保って響いてくる竹と石とのふれ合う音だが、あの静かな音がこの白と緑で構成される立体的形象のなかに跳ねあがって、言葉ではつくしきれない雰囲気ができあがっているのをそこに感ずるだろう」(奈良本辰也『京都の庭』河合出新書、1955年10

月)と評されているように、詩仙堂の名物であったことが類推される。

○《大徳寺》

【参考資料:『新旅行案内 12 京都とびわ湖』日本交通社、1955 年 2 月】

大徳寺は京都五山の上位にある。禅寺で有名な一休和尚や沢庵和尚の住んだ所としても知られている。伽藍はたびたび火災にかかったが、そのたびに再建され、現在の諸堂は文明年間に一休和尚によって復興され、寛文年間に完成したものである。禅宗建築の最もよく完備した典型で洛北第一の大伽藍で、勅使門・山門・仏殿・法堂・庫裡などが一直線に建てられている。(中略)

〔山門〕

勅使門の奥にあり、重層で五間三戸、左右に三廊がついている。天正一七年(一五八九年)千利休が修築したもので、天井には長谷川等伯筆の画竜がある。上層にある千利休殿は利休が秀吉にさらわれて自決を命じられた原因になったものであるという。

写真の出典：北川桃雄『美しき古都・京都(少年美術文庫)』(美術出版社、1951 年 5 月)

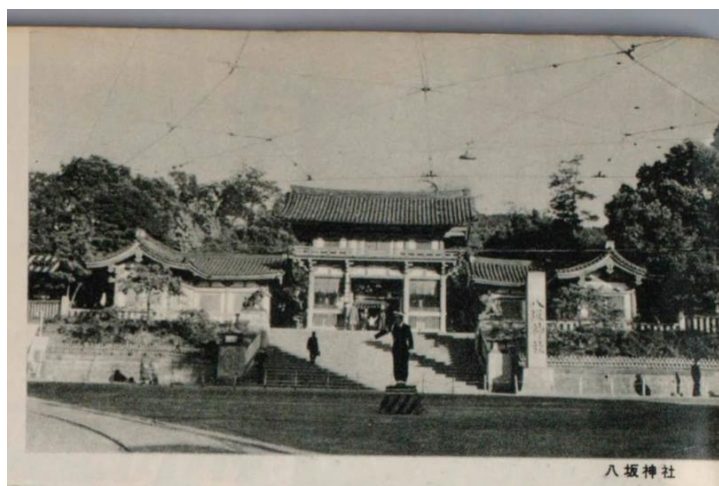


○《八坂神社》(京都市東山区)

【参考資料:京都府土木部都市計画課編『京都府の自然と名勝』1951 年 11 月】

祭神は素戔鳴尊、稲田比売命、八柱御子命で創立に関しては説多く一定していない。一説によれば齋明天皇の 2 年高麗の調達副使伊利使主来朝に際し新羅牛頭山に奉祀された素戔鳴尊の神魂を山城八坂郷に祀り後社殿を建立して感神院と称したと言う。明治元年八坂神社と改称し大正 4 年官幣大社に昇格した。貞観 18 年(876)夏洛中に疫病流行の際祠官勅を奉じこれを神泉苑に送つたのが祇園会の始まりで、その後度々の疫病に霊験があつたので臨時祭も行われたが中絶し後再興した。再度の炎上の結果現在のものは明治 34 年大修理を加えたものである。社殿は徳川家綱の造営に係り単層入母屋造桧皮葺、祇園造と呼ばれ楼門は室町時代様式、石鳥居は明神鳥居高 36 尺石造最大のもので国宝である。拝殿東

の燈竜は忠盛燈竜と呼ばれるものである。社宝中祇園社務家日記、祇園社絵図、木造狛犬、太刀4個を始め70余点は国宝となつている。末社の中蛭子神社は祇園造で国宝、蘇民将来社は疫除神として有名である。1月1日行われる白求祭は京の春の始まりであり7月の祇園祭山鉾巡行は夏祭りの華である。



出典：『現代人百科 No.16 京都・奈良 現代図絵』（日本織物出版社、1954年4月）

○《仁和寺》（京都市右京区）

【参考資料：京都府土木部都市計画課編『京都府の自然と名勝』1951年11月】

真言宗御室派大本山で大内山と号し古くは「にわじ」と訓じ仁和寺門跡御室御所と称する。法皇門跡寺院中の首位で仁和年間（888）宇多天皇先帝の遺志をつぎ本寺を創建勅号を賜った。昌泰2年宇多法皇盆信に従い当寺に於て落飾され当寺の南に1室及び円堂を設けこれに遷られ法務の場所とされたのでこれを御室と称し、以来法親王相承け御室門跡の名が起つた。寺運も旺んで当時は方2里に及び堂塔僧坊屋根を連れ、塔頭子院60に及んだが応仁の乱に一山鳥有に帰し、寺運退転しわずかに仮堂に法燈を伝えていた。寛政徳川家光の寺領24万両をうけ中興なり、寛政皇居造営に際し紫宸殿、清涼殿を賜り堂宇を建立したが、明治20年災禍により3宇を残し、全滅したが漸次復興した堂宇中金堂は紫宸殿、御影堂は清涼殿を賜つたもので五重塔と共に国宝である。寺後に成就山88ヶ所があり参詣者が多く境内の桜は名勝に指定されている。又国宝である遼廓亭は江戸中期、飛瀑亭は江戸末期の茶席建築の粋を尽したものである。

○《六波羅蜜寺》

真言宗智山派。山号は普陀落山、院号は普門院。かつて当地に地藏菩薩の小堂宇があり、地名に因み六波羅蜜寺と称した、と伝える。天曆五年（九五―）近畿地方に悪疫が流行したとき、空也が自刻の十一面観世音菩薩に祈請し靈驗があったので、これを安置して西光寺を建立し、応和三年（九六三）八月二十三日に落慶供養会を営んだ。第二世中信のとき、現寺名に復し、天台別院とした。源頼朝は当地に居館を構え、当寺を修理した。六波羅は鎌倉時代に幕府の六波羅探題の所在地として知られた。その後、足利義詮が貞治年間（一三六二―一六八）円海に命じて大修理を加え、真言宗とした。本堂は何度かの罹災後、貞治二年再建された。天正十九年（一五九―）豊臣秀吉は御供所として七十石の寺禄を与えた。末寺の十輪院・大

慈院・行願寺などすべて廃寺になる。西国三十三番霊場第十七番札所としても知られる。運慶坐像・湛慶坐像、平清盛像と伝える僧形坐像、四天王像四体、地蔵菩薩立像、康勝作の空也像、地蔵菩薩坐像、閻魔王坐像、吉祥天立像の十二体は鎌倉時代の作で、いずれも重要文化財に指定されている。本堂は寄棟造、本瓦葺、室町時代初期の代表的建築で重要文化財。口から六体の小仏を吐き出している空也像は特に有名である。(引用：『国史大辞典』)



出典：『現代人百科 No.16 京都・奈良 現代図絵』(日本織物出版社、1954 年 4 月)

「古都のすべては、きびしい冬の寒気と共に、静かに私の身体中に浸みとおった。それまでの私には、洛中洛外をひとり歩き廻った後に訪ねてゆくところがあり、温い茶を飲みながら、世間話にくつろぐことのできる場所があった。その日の経験のすべては、その町で生れて育ったひとりの女の、さりげない身振りや、眼ざしや、細い小さな身体の中に、組みこまれ、統一され、焦点を結んだ。そのことを、私はひとりで仏像のまえにたっていたときにも、あらかじめ予感していたのだ。」

→これまでの「私」は、京都を巡ったあとに、その体験を集約し、感想を伝えることのできる他者—京都で育った「ひとりの女」がいた。

しかしそういう予感は、今や、なかった。私の京都のすべてを要約することのできる生きた人間は、もうどこにもいなかったし、私の京都そのものが、もはやかつての私の京都ではなかった。 何度通ったかわからぬ小径を辿り、何度踏んだかわからぬ飛石を伝いながら、私はいまだかつてみたこともない町をみた。懐しい故郷……そんなものは、頭のなかにしかない。眼のまえにあるのは、一つの文化とその形式だけだ。そうしてある日、フィレンツェが私の眼のまえにあらわれたように、今また、京都が私の眼のまえにあらわれた

→他者に体験を語る行為を通し、京都の体験が総括可能なものになるという予感は、二つの理由でかなわないものとなる。一つは、語る生きた相手がいないこと。二つは、眼前の京都は既知の京都ではなく、「私」にとって未知の京都になっていたらである。つまり、眼前の町は、すぐに総括可能なものではなくなっていたといえる。

「懐しい故郷……そんなものは、頭のなかにしかない。眼のまえにあるのは、一つの文化とその形式だけ

だ。」

→京都はもはや、「私」と密に結び付いた土地としてではなく、異化されて、眼差しの対象として立ち現れる。
→フランスへの留学、「彼女」との別れを通して変容した自己は、街をまなざす視点そのものを変容させていく。繰り返し「古い」と形容されることから、京都それ自体は、目まぐるしい時勢を経ても基本的には変わらぬ風景を有する土地として登場する。変容したのは自己や眼差しであることを強調するために、帰国後すぐの日本体験の舞台として〈京都〉が選ばれたといえるのである。

《参考：加藤とフィレンツェ》

【参考資料：加藤周一「イタリアの印象」（初出：『西日本新聞』1952年10月23日—25日号、引用：『加藤周一著作集10 ある旅行者の思想』平凡社、1992年9月）

フィレンツェではすべてが美しい、糸杉も、トスカナの平野も、アルノーの流れも、僧院も、壁画も、宮殿も。そしてその美しさを感じる時、われわれは西ヨーロッパの文化の泉の一つを感じているのだ。感じるごとと、理解することとはどれだけちがうか、知識を本から汲みとることと、実際に一枚の絵を眺め、古い街の夕暮の匂いを吸いこむこととはどれだけちがうか。けれどイタリア文化の一面もまた、キャンティのごときものである。酒の味は講釈ではわからない。飲み、かつ酔い、髪黒く色白き女の頬のぼら色に染るのを眺め、その抑揚の強い言葉のにわかに甘くひびく時を知らなければならない。

→フィレンツェと、フランス留学後の加藤にとっての京都の街との共通性とは何か。それは、街で感じるあらゆるものが、自身の生きる日常生活・実生活と密着したものとして自然に流されるものではなく、〈文化〉という概念を理解し、感じるための媒体として現前化しているという点である。ゆえに、留学後の加藤における、京都という街への見方は「一つの文化とその形式」として表現されていると考えられる。

第七段落

人影もみえぬ神護寺の広い境内。刺すような北風が吹きぬけ、冷え切った耳と指先に痛みを感じながら、私はながく五大虚空像菩薩と対峙した。金箔の木像が、薄暗がりのなかに端座して動かず、眼光炯々として、それは単に出世というものでも、慈悲というものでもなく、一段と肉感的な迫力の、人を捉えてはなさぬものであった。天平仏はこういうものではなかった。たしかに九世紀の日本では、何かが変わった、一一世紀末から一二世紀初めの北フランスで大きな変化がおこったように。それは平安初期の仏像がゴシック初期の彫刻に似ているということではない。それはたしかに似ていない。しかしその変化の性質——一度その変化がおこると、そこで成立した形がその分かの将来をはるか後まで支配せざるをえないような変化が、彼我の比較を無限に興味深いものにす。そのとき私は、文字通り手に汗を握る思いで、仏像を見ていた。西洋の芸術を見なれた眼で、もう一度日本の古美術を見たら、それが小さく、みずぼらしく見えないだろうか、という考えほど愚かなものはない。小さくみえたのは、東照宮で、桂離宮ではない。仏像は小さく見えなかったばかりではない、その精神の肉体とのつり合い、形と材料との調和、量感と動きとの解決法において、ゴシック彫刻と対峙して、見事に拮抗するものであった。それは様式の問題ではなくて、質の問題であり、汲めども尽きぬ考えに、人を誘わずにはおかないものである。私はその後日本の芸術について書くようになったが、それは愛国心とは何の関係もない。私が今も薬師寺の三尊をかぎりなく愛するのは、北魏の仏頭やランスの天使をかぎりなく愛するからである。

○五大虚空像菩薩



【参考資料：神護寺 HP「神護寺 寺宝紹介」<http://www.jingoji.or.jp/treasure02.html>、2026 年 2 月 9 日最終閲覧】

本像は五体とも像高 90 センチメートルあまり。ほぼ同形の坐像で手の形や持物だけが異なる。

肉身の色は中尊の法界虚空蔵が白色、東方尊金剛虚空蔵は黄色、南方尊宝光虚空蔵は緑色、西方尊蓮華虚空蔵は赤色、北方尊業用虚空蔵は黒色に塗り分けられている。

いまは一直線に祀られているが、もとは東寺講堂の五菩薩像などと同様に、中尊を囲んで左右斜め前と、斜め後ろに他の四体が配されていた。

これらは、いずれも一木造で、両腕のひじから先に別材を矧ぎ付けるほかは一材から彫り出し、部分的に木屎漆で仕上げている。

彩色は九世紀末に塗りなおした記録があり、当初のものではない。

木製の宝冠、瓔珞、臂釧などの装身具も後のもので、光背、台座も失われている。

「たしかに九世紀の日本では、何かが変わった、一一世紀末から一二世紀初めの北フランスで大きな変化がおこったように。それは平安初期の仏像がゴシック初期の彫刻に似ているということではない。それはたしかに似ていない。しかしその変化の性質——一度その変化がおこると、そこで成立した形がその分かの将来をはるか後まで支配せざるをえないような変化が、彼我の比較を無限に興味深いものにする。」

「仏像は小さくみえなかったばかりではない、その精神の肉体とのつり合い、形と材料との調和、量感と動きとの解決法において、ゴシック彫刻と相対して、見事に拮抗するものであった。」

→仏像とゴシック初期の彫刻は表現そのものとしては似ていない。一方で、〈精神〉と表出された肉体、ひいては全体的な調和、バランスという点において、ゴシック彫刻と並ぶものとして受容されている。

【参考資料：加藤周一「仏像の様式—彫刻における現実主義の概念と本朝仏教彫刻の様式の変化について—」『芸術論集』岩波書店、1967 年 9 月初出、引用：『加藤周一著作集 12 芸術の精神的考察Ⅱ』平凡社、1978 年十一月】

藤原時代の末から鎌倉時代へかけて、仏教ばかりではなく、社会の構造に大きな変化がおこった。もし「時代の精神」というものがあるとすれば、時代の精神は大いに変わったはずであり、何をつくろうと、その時代のつくり出すすべてのものに、その精神の特徴は刻まれていたはずであろう。彫刻がその例外でなかったろう、ということは、容易に想像される。しかしその想像をたしかめ、彫刻にあらわれた時代の

精神の特徴が、具体的にどういうものであったかを知るためには、鎌倉の肖像を、別の時代の阿弥陀ではなく肖像と比較し、別の時代の菩薩を、鎌倉の肖像とではなく菩薩と比較しなければならない。

鎌倉現実主義の場合は一例にすぎない。私は同じことが飛鳥から天平、平安前期を通して、平安後期に到り、さらに鎌倉までつづく仏教彫刻の全体についてもいえると思う。

→時代の精神の変化と仏像との連動

【参考資料：加藤周一「紅色娘子軍、ゴダールおよび仏像」『展望』筑摩書房、1972年2月号初出、引用は『加藤周一著作集 11 芸術の精神的考察 I』平凡社、1979年8月】

平安時代の彫刻家たちは、決してただ像規に従って、器用に機械的に制作した工人たちではなかった。彼らはその名まえのほとんどすべては今失われている彫刻によって世界を認識し(その世界はむろん人間の世界ばかりでなく仏の住む世界へも連続していた)、同時に自己の理想を表現することに成功した藝術家たちであった。そればかりではない、その時代は新しい形、新しい様式を生みだすことのできるほど創造的であったし、個々の藝術家は、時代によってあたえられた様式の枠のなかで、多くの仏像のそれぞれの形に、もう一つの仏像の新しい形をつけ加えることを知っていたのである。

「私はその後日本の芸術について書くようになったが、それは愛国心とは何の関係もない。私が今も薬師寺の三尊をかぎりなく愛するのは、北魏の仏頭やランスの天使をかぎりなく愛するからである。」

→薬師寺の三尊も北魏の仏頭もランスの天使も、特定の時代の特定の場所における精神や時代の変化と結びついた一つの芸術として等しく並べられる。こうした眼差しは本章前半にて描かれてきた、風景への眼差しと連動する。ここでは、同様に仏像を通して、加藤の「眼の変化」が描かれているのである。

第八段落

東京へ帰ると、まもなく私は本郷の病院の仕事に戻った。同じ医局の三好博士と牛肉屋で飲み、酔った三好さんが「お富さん」を唱うのを聞いた。それは私の留守の間に一世を風靡した歌である。「この歌を知らない男があるかねえ」と三好さんはいった。私はまた旧友の中村真一郎や原田義人にも会った。そこで《君の名は》という連続放送劇が流行していたということも知った。「要するに男女のすれちがいが、日本中を舞台にしていつまでも続くわけだ、劇というほどのものではないがね」と中村はいった、「それにしても、これを知らなければ、西洋ぼけということになるだろう」。原田はハムブルクの大学で日本語の講師をしていたことがあり、彼にはそこでも会ったし、パリでも会った。東京には私よりも先に帰って、駒場の大学でドイツ語を教えていた。「戦後の改革に対する反動というか、逆もどりの傾向は、いろいろの面に出て来ていると思う」と彼はいった。それは私たちがヨーロッパでも話しあっていたことであった。

○お富さん

「日本のポピュラー音楽。歌は男性演歌歌手、春日八郎。1954年発売。作詞：山崎正、作曲：渡久地政信。」(『デジタル大辞泉プラス』)

【参考資料：「明るい曲でビックリ 三ヵ月でなんと三十万枚発売 作詞者 前橋の山崎正さん」『上毛

新聞』朝刊、1954年11月21日朝刊】

…山崎さんも作曲の渡久地政信、唄つてゐる春日八郎のご兩人も“お富さん”がこれ程ヒットするとは夢にも思わなかつたという。春日はこの一曲で一流歌手にのしあがつてしまった。

○…トンコ節と同様子供から老人にまで“お富さん”は親しまれている。ところがこの曲はトンコ節と違い、新しいなかに古いものという、時代の流れにピッタリしたのがこの曲がヒットした理由だろう。

○中村 真一郎 (1918～1997)

戦後、加藤周一、福永武彦と共同執筆の時評『CAMERA EYES』を「世代」に連載（昭21・7～12）し、新稿を加えて『1946 文学的考察』（昭22・5 真善美社）と題して刊行。豊富な文学的教養に注目されたのをはじめ、連作長編の第一作『死の影の下に』を季刊「高原」に連載（昭21・7～22・9、四回、未完）、梅崎春生、野間宏らとともに戦後派作家として脚光を浴びた。また戦時中マチネ・ポエティックが試みた押韻定型詩の主張とその実験的作品を発表し、詩壇の話題になったが、その成果をまとめた『マチネ・ポエティック詩集』（昭23・7 真善美社）は、実験の意味を正当に理解されなかった。野間宏の短編集『暗い絵』に続いて、長編『死の影の下に』（昭22・11）が真善美社から新人創作シリーズの一冊として刊行されたが、このシリーズに『アプレ・ゲール クレアトリス』と命名、このアプレ・ゲールがその後社会的な流行語になる。マチネ・ポエティックの友人たちと「方舟」、さらにのちには「文学51」を発刊しながら、『シオンの娘等』（昭23・12）『愛神と死神と』（昭25・6）『魂の夜の中を』（昭26・6）『長い旅の終り』（昭27・11）をそれぞれ河出書房より刊行、『死の影の下に』の長編五部作を完成した。

戦争中、堀辰雄や片山敏彦や渡辺一夫ら知識人のヒューマニズムに感動した中村真一郎は、西欧の高貴な精神と、日本の伝統の優れたものとの結びつきを意図して、広い視野から、二〇世紀の前衛的な西欧文学を精力的に紹介し、私小説中心の日本の文学的風土に鋏をいれ、正当な文学の確立につとめた。五部作長編のあと、『夜半楽』（昭29・5 新潮社）『冷たい天使』（昭30・2 講談社）を書下ろしで刊行、五部作でおこなわれたさまざまな文学的実験を完成させるとともに、真の意味での風俗小説を試み、『回転木馬』（昭32・11 講談社）は好評を博した。（池内輝雄 2021 記「中村 真一郎」『日本近代文学大事典』）

○原田義人 (1918～1960)

独文学者。東京生れ。東大独文科卒。一高、東大教授。昭和一五年、東京府立五中で同期の加藤道夫や、鳴海四郎、鬼頭哲人、芥川比呂志らと新演劇研究会を結成、国民新劇場（旧・築地小劇場）での発表会には出演もした。昭和一七年、大学卒業後応召、戦後に復員して大学の研究室にいたとき、中村真一郎に推薦されてマチネ・ポエティックの雑誌「方舟」の編集長になり、新しい美学の創造に専念した。友情にあつく、マチネのグループの世話役的存在として信頼をうける。二九年、ハンブルク大学日本語講師として渡独、二年近く滞在。独文学者としては、カフカ、ブロッホ、ムジールに関心をもった。優れた評論『ある寺院における夢想』（「方舟」昭23・9）、カフカの『審判』『城』などの翻訳のほか、『現代ドイツ文学論』（昭24・10 福村書店）『ドイツの戦後文学』（昭29・2 早川書房）、遺著『反神話の季節』（昭36・4 白水社）がある。（小久保実 1984 記「原田義人」『日本近代文学大事典』）

○《君の名は》



＜出典：「君の名は 松竹作品」

（『新映画』10月号、映画出版社、1953年10月）

菊田一夫作の連続放送劇。1952年（昭和27）から54年にかけてNHKラジオで放送された。東京大空襲下の銀座数寄屋橋で初めて知り合った後宮春樹と氏家真知子は名前も告げずに再会を約して別れるが、戦後に2人が会ったとき、真知子はすでに他の男と結婚することになっていた。物語はその後の2人がたどる「すれ違い」の悲恋メロドラマで、放送時には銭湯の女風呂ががら空きになるといわれるほど人気があった。53年に大庭秀雄監督、佐田啓二・岸恵子主演で映画化されて大ヒットとなり、2部、3部と製作、いずれも興行的に大成功を収めた。岸恵子が頭から首にかけて巻いた長いストールが「真知子巻き」として当時大流行した。今日も数寄屋橋跡の小公園には記念碑が残っている。（〔長崎一〕「君の名は」『日本大百科全書』）

→当時大流行していた「お富さん」や「君の名は」に関し、加藤が帰国後はじめて知るという描写が記されることも、フランス留学中の時勢の変化を示している。

第九段落

私は妹の家に間借りをして、世田谷の上野毛から本郷の病院まで通っていた。病院には仕事があって無きが如くであった。やがて私はある鉱山会社の日本橋本店で、隔日の午後に医務室の仕事をひきうけることにした。その仕事は、医学的に興味のあるものではなかったが、月給は、私ひとりの生活を支えるのに充分であった。また一週間に一度ある私立大学の文学部の教室へも出かけた。そこではフランス文学の講義をするという名目のもとに、フランス語を教えようとしたが、学生は名目を重んじて、実をとろうとしなかった。収入は辛じて旅費を払うのに足りた。日本とフランスの社会は似ているようで、大いにちがうところもある、と私は考えた。「そんなことは、あたりまえですよ」と渡辺一夫先生はいった、「わけのわからぬ苦勞をみんながしてきたのです。それが有難いお国ぶりですよ……」。

「私は妹の家に間借りをして、世田谷の上野毛から本郷の病院まで通っていた。病院には仕事があって無きが如くであった。やがて私はある鉱山会社の日本橋本店で、隔日の午後に医務室の仕事をひきうけることにした。」

→東京大学医学部附属病院に所属しつつ、三井鉱山株式会社本店医務室に隔日勤務をしていた。

「また一週間に一度ある私立大学の文学部の教室へも出かけた」
→明治大学における非常勤講師の業務と指すと思われる。

○渡辺一夫（1901～1975）

フランス文学者、評論家。

東大名誉教授、学士院会員。東京本郷の生れ。大正一四年東京帝大仏文科卒業。旧制東京高校教授のかたわら、昭和一一年以後東京帝大文学部講師併任、一四年東京高校退職、一七年東京帝大文学部助教授、二三年教授。三七年退官にいたるまでフランス文学を講じ、辰野隆、鈴木信太郎、中島健蔵らとともに特色ある学風を築く。その門からは森有正、中村真一郎、加藤周一、大江健三郎らが輩出。研究面では昭和初頭から未開拓のルネサンスに着目、散文物語、演劇、詩歌の各分野にわたる精密鋭利な研究を精力的に発表し、わが国フランス・ルネサンス研究の先鞭をつけ、その指導的存在であったが、とくにフランソワ＝ラブレールの翻訳、研究は、生涯の情熱を注いだ画期的業績として日仏両国で高く評価される。（二宮敬「渡辺一夫」『日本近代文学大事典』）

第十段落

鉱山会社は九州で石炭を掘っていた。商売の景気は悪かった。人事部長は——本社の医務室は人事部に属していた——会社の《クラブ》で、ここには世界中の酒があると、自慢しながら、「またどこかで戦争をはじめてくれないものですか」といった、「景気がよかったのは、何ととっても朝鮮戦争のときですよ、あのときはよかったね……」「戦争がなければもうかりませんか」「もうかりません」「左翼公式主義そのものですな」と私はいった。しかし人事部長は、冗談を理解しなかった。「組合がいけませんね。あれはアメリカが押しつけたもので、日本の実情に合っていない、あんなものがあるからだめなんだ、もう一杯、いかがです？」

○朝鮮戦争休戦後の景気

【参考資料：織田誠夫「インフレを孕む 下期景気観測」『経済展望：a monthly publication on economy and management 27(4)』経済展望社、1955年4月】

ところが、朝鮮休戦成立以来、朝鮮特需は漸減し、駐留軍関係特需が主となるようになった。年四一五億ドルに及ぶ各種の貿易外収入の中で、兵器関係は、一割以上を占め、わが防衛生産の中心となっていたのである。この間わが防衛庁所管の海陸空自衛隊の発注は、まだいう程のものでなく、到底兵器特需の題削減の埋合せ得る段階に至っていない。たとえそこまでいつているとしても、それはドル収入ではなくて、わが財政支出によるものであるから、性質はまるでちがう。

こう考えると、アメリカ発注の多寡に一喜一憂する特需というもの、いかに持続性、安定性のすくないものか想像されよう。こういつたアメリカ依存の特殊経済から、出来るだけ早く足を洗つておくに如くはないのである。一例をかの大同製鋼の高蔵工場（元工廠）や日平産業にとつてみても、受注不安定常なく、到底採算に立つた企業経営は出来ないのだ。特需依存の高い企業ほど、実は不安定さが濃いのである。

第十一段落

私は九州のヤマを見物に行った。見物に行くための便宜は、会社がはかってくれた。しかし若い労務課の職員が組合の幹部をよく知っていたので、私は組合への紹介状も持っていた。そこで何がおこっているかを、私なりに見きわめるためには、双方の言分を聞き、双方の立場から眺めてみなければならない、と私は考えていた。しかし行ってみると、会社側は、昼まはヤマを案内し、夜は宴会を晩までつづけて、組合と私が接触することを妨げているとしか思われなかった。「あの連中と話したって、通じやしませんよ」と現場の人事課長は芸者の肩を抱きながらいった、「私は何度も交渉しましたがね、実際刺しちがえてでも、殺してやりたい位だ……」。それではむろん話が通じなかったはずだろう。私の話が通じるか通じぬかは、その男のさし図をうけるまでもない。私は二度めの宴会を断った。「先生はだんまりすけべの方ですか」。私は九州まで芸者を見にきたのではないといった。組合は懇切であった。

「私は九州のヤマを見物に行った。」

→三井鉱山の現場

【参考資料：鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか—『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018年10月】

時代の転換期に、問題の現場を見たいと思って九州まで取材に出かけるのは、現場を見なければものはいえないという実証主義に基づくところが大きい。この取材を基にして書かれた小説が『神幸祭』（『群像』一九五八年七月号—一〇月号）である。加藤が取材したのは福岡県にある三井田川鉱業所の採鉱である。田川市は筑豊炭田に含まれ、飯塚市、直方市と並んで「筑豊三都」と呼ばれ、三井鉱山を中心に炭鉱の街として栄えていた。

「そこで何がおこっているかを、私なりに見きわめるためには、双方の言分を聞き、双方の立場から眺めてみなければならない、と私は考えていた。」

○三井鉱山三池鉱業所争議

昭和三十四年（一九五九）一月から三十五年十月まで約一年十ヵ月にわたって、福岡県大牟田市の三井鉱山三池炭鉱でおこった日本労働運動史上もっとも激烈な争議。略称、三池争議。当時日本の独占資本は安保条約の改定による日米軍事同盟の強化をはかると同時に、アメリカ「石油帝国」のエネルギー支配のもとで、「石炭から石油へのエネルギー革命」、「石炭産業斜陽論」を唱えて、輸入石油への依存と国内炭鉱のとりつぶし政策をすすめた。六十三年度までに炭鉱労働者約十一万人を解雇する方針が示された。炭鉱労働運動にとって「合理化」反対闘争が焦眉の課題となった。その焦点は三池炭鉱の解雇反対闘争であった。三池労組は強力な職場闘争を展開して、職場での労働者の発言権を確保し、当時日本最強の労働組合を誇っていたから、ここが労資対決の決戦場にえらばれた。三十四年一月、三井鉱山は傘下の六山（三池・山野・田川・砂川・芦別・美唄）に対して六千人の希望退職を募集したが、応募者は全体で千三百二十四人、とりわけ三池ではわずかに百五十二人とどまった。そこで会社は同年十二月十一日、三池炭鉱に対して千二百七十八人の指名解雇を通告したが、そのなかに四百人の職場活動家が「生産阻害者」の名目でふくまれていたから、明らかに政治的意図をもった攻撃であった。三十五年一月二十五日、会社のロックアウト実施に対して組合は無期限ストライキで対抗し、二百日に及ぶ長期ストライキをつづけた。炭労・総評を中心に支援体制が組まれ、全国から三池にかけつけた労働者は延べ三十七万人にのぼり、資金

カンパ二十七億円が寄せられ、国際的支援も寄せられた。折から「六〇年安保闘争」が高揚していたから、三池争議はこれと相互に支えあい促進もあった。しかし一方、三井鉱山の他の五炭鉱労組は三池労組との共同闘争に立ち上がり、三池労組にも三月十七日第二組合＝三池炭鉱新労働組合がつけられた。当時一万五千数百人の組合員中、約三千人が新労組に組織され、ストライキを打ち切って就労をはかり、日とともに組織を拡大して労働者相互の対立が激化した。また警察・裁判所・海上保安庁・中央労働委員会などの国家機構が全面的に会社側に味方した。さらに会社は暴力団を動員して第一組合に攻撃を加え、死者も発生した。争議の最終局面はホッパー（貯炭槽）の争奪をめぐって二万人の労働者隊と一万人の警官隊の対峙となり、流血の惨事が予測された。そこで組合側は中央労働委員会の斡旋を受諾して、三十五年九月、指名解雇を承認して十月には争議を終結することを余儀なくされた。（塩田庄兵衛「三井鉱山三池炭業所争議」『国史大辞典』）



▲三井三池争議の様子 参照：『アルバム戦後 15 年史』（朝日新聞社、1960 年）

第十二段落

争点はあらゆるところにあった。ベルト・コンヴェイヤーは、会社側によれば、労働をはるかに楽にした設備であり、組合側によれば、労働者を絶えず追いたて、労働を強化した道具である。坑木の代りに鉄の組杵を入れたのは、会社側によれば、落盤の危険を除き、安全度を飛躍的に増大させた措置であり、組合側によれば、主な危険がガス爆発である坑内の安全度に、大した影響のない処置にすぎない。労働者の生活が貧しいのは、会社側によれば、酒を飲んで自分の身体をすりへらし、浪費して高利貸しに頼るからであり、組合側によれば、会社が労働者の安全を計らず、明日の生命も知れぬ状態で、酒も飲まずに生きてゆけないからである…双方の証人の数が多くなり、議論が細かくなればなるほど、すべての争点について、双方の言分は、いよいよ決定的にはなれてゆくようであった。どちらが正しいか。どちらかの立場において、現場を経験しないかぎり、第三者の客観的な答はありえないように思われた。答がありえないのは、情報の不足によるのではない。ベルリンの空路の外へ航空機が出たか、出なかったかは、関係政府の対立する意見の他に、何らの情報がないから、第三者に判断することができない。しかしフランス革命を呪うか、讃美するかは、情報のかぎりない豊富さにもかかわらず、つまるところ問題がその人の立場に帰するので、第三者の客観的な判断が不可能なのである。両極端の中を採ることには、むろん、大した意味がない。フランス革命が、よくも、わるくもなく、無益無害の事件であったというわけにはゆかないだろう

う。ベルト・コンヴェイヤーは坑内労働の性質を著しく変えたにちがいない。それが労働者にとって、よくも、わるくもない、ということは、おそらくありえないだろう。私は太平洋戦争の間、いくさと自分との間に知的距離をおくことにより、客観的判断の甚だ正確であり得るということを経験した。しかし九州の炭坑では、客観的判断がほとんど不可能な状況に出会ったのである。そういう場合には、判断を放棄することもできるだろう。私は九州で、調停者でも、審判官でもなかった。しかし判断を放棄できない場合には、どうするのか。客観的な、つまり科学的な判断が不可能であるとして、しかも意見を決める必要があったら、私はどうするであろうか。私は九州でそういうことを考え、坑道のなかへ入った私自身の経験それがどれほど短かったにしても――へ戻るほかないだろうと思った。暗い危険な坑道のなかから出て来る度に、出口に見える一片の青空。毎日一片の青空を全身のよろこびを以て感じる――いや感ぜざるをえない生活を生きている人々、彼らが酔っぱらおうと、無理な議論をしようと、毎日青空の下で暮しているわれわれが、彼らの言分を拒否することはできないだろう。彼らがまちがっているということを客観的に説明できないかぎり、彼らの言分はすべて正しい、と私はそのときに思った。傍観者としての判断は、常に可能ではない。故に傍観者であるのをやめるときがなければならない……。

○炭鉱におけるベルト・コンヴェイヤー

「近年集団ベルトコンベヤーの使用により、斜坑の運搬能力は飛躍的に増大し得る様になつて、一つの斜坑々口より一日五千吨程度の運搬は容易である。之は北海道の夕張、九州の三池及び高松の諸炭鉱に設備されている」（徳富正孚『石炭 ダイヤモンド産業全書 第7』ダイヤモンド社、1949年4月）

争点	会社側の主張	組合側の主張
ベルト・コンヴェイヤー	労働をはるかに楽にした設備	労働者を絶えず追い立て、労働を強化した設備
坑木から鉄の組枠の導入	落盤の危険を除き、安全度を飛躍的に増大させた	主な危険はガス爆発であり、安全度への影響は限定的
労働者の生活の貧困	酒を飲み浪費し高利貸しに頼る自己責任	危険で不安定な労働条件のため酒なしに生きられないという構造の問題

「しかしフランス革命を呪うか、讃美するかは、情報のかぎりない豊富さにもかかわらず、つまるところ問題がその人の立場に帰するので、第三者の客観的な判断が不可能なのである。両極端の中を採ることには、むろん、大した意味がない。フランス革命が、よくも、わるくもなく、無益無害の事件であったというわけにはゆかないだろう。ベルト・コンヴェイヤーは坑内労働の性質を著しく変えたにちがいない。それが労働者にとって、よくも、わるくもない、ということは、おそらくありえないだろう。」

→問題に対し、第三者としては客観的な判断が不可能であることを自覚。

→自覚しつつも、「それが労働者にとって、よくも、わるくもない、ということは、おそらくありえないだろう。」と、いわゆる両者の間をとること―中立的な見方に寄せることはせず、労働者側の論理に寄り添っていく。その姿勢は、結部にかけてより色濃くなっていく。

「私は太平洋戦争の間、いくさと自分との間に知的距離をおくことにより、客観的判断の甚だ正確であり得るということを経験した。しかし九州の炭坑では、客観的判断がほとんど不可能な状況に出会ったのである。そういう場合には、判断を放棄することもできるだろう。私は九州で、調停者でも、審判官でもなかった。しかし判断を放棄できない場合には、どうするのか。客観的な、つまり科学的な判断が不可能であるとして、しかも意見を決める必要があったら、私はどうするであろうか。私は九州でそういうことを考え、坑道のなかへ入った私自身の経験——それがどれほど短かったにしても——へ戻るほかないだろうと思った。暗い危険な坑道のなかから出て来る度に、出口に見える一片の青空。毎日一片の青空を全身のよろこびを以て感じる一いや感ぜざるをえない生活を生きている人々、彼らが酔っぱらおうと、無理な議論をしようと、毎日青空の下で暮しているわれわれが、彼らの言分を拒否することはできないだろう。」

→客観的な判断が不可能な状況で、思考の拠りどころをどこに据えるべきか。そうした問題に直面したとき、加藤は、「坑道のなかへ入った私自身の経験」に立ち帰るほかないと思い至る。暗い坑道の出口に見える青空という、そこに生きる労働者の人々と同じ景色を眼差す。それにより、体験を共有すると同時に、「彼ら」と「われわれ」の生活との違いを認識することによってはじめて、「彼ら」の言い分を受容する姿勢が生じているといえる。

「彼らがまちがっているということを客観的に説明できないかぎり、彼らの言分はすべて正しい、と私はそのときに思った。傍観者としての判断は、常に可能ではない。故に傍観者であるのをやめるときがなければならない……。」

→以上の体験を経て、加藤は、取材する人間としての傍観者という立場や視線に揺らぎを抱く。そして、「傍観者」ではなく、絶えず目の前の事象に対峙し意見を表明する立場へと変わりゆく兆しを見せながら、本章は結ばれる。